
予言の御子

syana

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

予言の御子

【Nコード】

N9842N

【作者名】

syana

【あらすじ】

先天性ナルコで実力、血継限界、両親、九尾などをひた隠ししながら、世界を平和に導く物語。少し原作と性格が異なります。

ナルト登場人物設定とオリキャラ設定（前書き）

話の設定です。

ナルト登場人物設定とオリキャラ設定

うずまき ナルト

父：波風 ミナト（故人）

母：うずまき クシナ（故人）

性別：女（普段は男に変化の術使用）

誕生日：十月十日

星座：天秤座

血液型：B型

あだ名：ナルト、七色の御子、七色の姫、九尾のガキ、九尾の人柱力、意外性NO.1、御子、姫、成姫、ナルト様、姫御子、御子姫

好きな物：一楽のラーメン、お汁粉

嫌いな物：生野菜

趣味：悪戯、植物の水やり

●必需品●

曼荼羅鏡：攻撃を無力化し、真実の歴史を覗くことが出来る

天魔剣：持ち主の気分によって切れ味が変わる恐ろしい剣

破天魔：曼荼羅鏡と天魔剣が合体した杖で人の命を裁くことが出来る

● 性格 ●

表：目立ちたがり、考えなし、忘れっぽい

裏：冷静沈着

共通：温厚、負けず嫌い、頑固

うずまき一族：元渦の国、渦潮隠れの里に住んでいた。封印術を得意とし、生命力に長けた一族、また千手一族の遠縁（何人が生き残りがいた模様）

成宮一族：元渦の国、渦潮隠れの里に住んでいた。血継限界だが、何者かに滅ぼされた（最後の末裔がクシナ）全てのものを浄化し、四神と契約していた一族。

師匠：自来也、はたけカカシ、御柱の大王、キラビー、フカサク

四神：東西南北を管理する神の代理人

■紅蓮：南を管理する神の代理人で別名朱雀ともいう

■白蓮：北を管理する神の代理人で別名玄武ともいう

■紫音：東を管理する神の代理人で別名青竜ともいう

■麗音：西を管理する神の代理人で別名白虎ともいう

オリジナルキャラクター

●虹神部隊●

*皆つずまき一族の血をひいている

■火屋 武■

容姿：赤髪、赤目、美形だが目つきが悪い

性別：男

身長：199・0cm

体重：69・5kg

誕生日：四月十八日

星座：御羊座

血液型：O型

好きな物：七色の御子、激辛料理、麺料理、御子の手料理

嫌いな物：七色の御子を悲しませる事、甘い物

役名：紅^{くき}禧

属性：火

性格：情熱家、行動的、短気

ナルトの呼び名：御子

■ 水野 龍牙 ■

容姿：赤髪、赤目、美形で目が大きいため女に間違われる

性別：男

身長：144・1cm

体重：35・5kg

誕生日：六月五日

星座：双子座

血液型：A型

好きな物：七色の御子、激甘料理、御子の手料理

嫌いな物：七色の御子を悲しませる事、激辛料理

役名：黒禧くろしき

属性：水

性格：冷静沈着、計算高い、合理主義

ナルトの呼び名：姫御子

■塚原 幸平 ■

容姿：赤髪、赤目、童顔

性別：男

身長：175.5cm

体重：56.0kg

誕生日：七月二十三日

星座：蟹座

血液型：O型

好きな物：七色の御子、御子の手料理、動植物

嫌いな物：七色の御子を悲しませる事、争い事

役名：黄禧レウキ

属性：土

性格：おおらか、寛大、努力家

ナルトの呼び名：姫様

■紀伊 薫■

容姿：赤髪、赤目、筋肉質

性別：男

身長：2 . 8 0 c m

体重：6 6 . 2 k g

誕生日：十二月十八日

星座：射手座

血液型：A B 型

好きな物：七色の御子、御子の手料理、御子との思い出

嫌いな物：七色の御子を悲しませる事、

役名：青禧しょうき

属性：木（雷）

性格：負けず嫌い、好奇心旺盛、ワイルド

ナルトの呼び名：御子姫

■金本 卓■

容姿：赤髪、赤目、ごつい体

性別：男

身長：185・2cm

体重：55・2kg

誕生日：十月二十二日

星座：天秤座

血液型：B型

好きな物：七色の御子、御子の手料理、可愛い物

嫌いな物：七色の御子を悲しませる事、匂いがキツイ物

役名：白襦びじゅ

属性：金（風）

性格：気分屋、寛大、世話好き

ナルトの呼び名：御子様

■有栖川 炎■

容姿：オレンジ髪、赤目、痩せ形、モデル体型

性別：男

身長：165・0cm

体重：48・5kg

誕生日：二月十八日

星座：水瓶座

血液型：A型

好きな物：七色の御子、御子の手料理、歌うこと

嫌いな物：七色の御子を悲しませる事、甘い物

役名：炎柱
えんちゆう

属性：太陽

性格：情熱的、一途、愛情深い、信念が強い

ナルトの呼び名：姫

■有栖川 鏡■

容姿：オレンジ髪、赤目、モデル体型

性別：女

身長：155・5cm

体重：45・0kg

誕生日：五月二十一日

星座：雄牛座

血液型：A型

好きな物：七色の御子、御子の手料理、ピアノを弾く事

嫌いな物：七色の御子を悲しませる事、甘い物

役名：鏡心きょうしん

属性：月

性格： 奥ゆかしい、世話好き、夢想家、疑り深い

ナルトの呼び名：成姫

● 服装 ●

全員黒で統一

● 武器 ●

破魔剣：一人一人に合った属性を最大限に伸ばし、相手の術を無効化する

銃：遠距離用に使用

神

御柱の大王

ナルトの世界を作った神様であり、全ての異次元世界を行き来出来、統率する人。

この話のキーマンのうちの一人。

シルヴァ・レヴァノン

御柱の大王の娘、人間たちを学習能力がなく、愚かと思っているが、ナルトだけはとにかく甘い。

▼悪魔▼

ノウデイ

ナルトを生け捕り世界を手に入れようとしているうちの一人。

■未来編■

朱音

性格：おしとやかだが、曲がったことが大嫌い

ナルトの子孫にあたる

ハジメ

性格：情に熱く、涙もろいが遅刻をよくする

ツトム

性格：冷静沈着で口が悪く、女嫌い

★朱音、ハジメ、ツトムは奈良 聡樹が率いる第7班に所属★

奈良 聡樹

性格：めんどくさがり、冷静、負けず嫌い

本

下記にある本は、御柱の大王が作ったもので悪魔たちや、人間達が躍起になって探している書。

世界に選ばれた一族しか持つことがままならないと言われている、そのうちの一人がナルトである。

この本達は一つになると恐ろしいことが起きると言われているが・

リーヴァイの書…別名は魔術の書、魔術の成り立ちから全ての魔術に関する書

レヴァノンの書…別名は創生の書、その名の通り世界の創生に関する書

ナリミヤの書…別名は忍びの書、忍びの成り立ちから歴史に関する書
シーファの書…別名は尾獣の書、尾獣の成り立ちから歴史に関する書

シルビルの書…別名は神の書、その名の通り神々のことに関する書

サテンの書…別名は死の書、死んだ後のことと地獄に関する書

アマエルの書…別名は天の書、天国のことと救世主に関する書

ナルトの友人、奈良、日向、油女、山中、犬塚、秋道、春野、うちちは、リー、テンテン、火影などが宝珠の裏話や真実を知っているが、他国では七色の宝珠の話しか伝わってない、それは国外の忍びにとってナルトの死体がのどから手が出るほど欲しいから、彼らと信用された者しか話を受け継ぐ権利はない

第1話 一族の歴史の闇（前書き）

文章については本当に自分でも駄目だなあとよく思います。
なので誤字、脱字などあると思いますが宜しくお願いいたします。

第1話 一族の歴史の闇

（未来の子孫：朱音視点）

私は今日、下忍試験に合格し家路を急いでいた。

「じゃあ、また明日！」

「うん！じゃあな・・・遅れるなよ！」

「お前が言っな・・・じゃあな」

そして、家に帰ったら父が珍しく帰宅していた。

「ただいま」

「おかえり（なさい）」

手を洗い、食事を終えたところで両親が風呂上りに奥の屋敷に来るようにと指示があった。

約束通りその屋敷に行った。

「父さん、母さん、話って何？」

「あなたには酷かもしれないけど、この国、木の葉隠れの闇の一部と、私たち先祖のある人たちの話を聞いて欲しいの」

「・・・朱音・・・七色の宝珠の話を知っているか？」

「うん」

「それを今から口に出して音読して欲しい」

「うん、えつと確か・・・」

遙か昔、一人の少女あり

其の者、七色に光る魂持ちけり

その力、七色の宝珠の如く全てを照らし出す

その封印されし力、解印されしとき、

そこに五人の番人（木、火、土、水）と二人（月、太陽）の守護者と解印されし力、世界中を平和に導いたり

という御伽話だね・・・」

「ああ、しかし、その話は御伽話ではないんだ」

意味がよく理解出来ないので首をかしげた。

「どういうこと？」

「この話は今から二千年以上昔の話になる・・・その者の名はうずまきナルト・・・火影まで登り詰めた人物だ」

「それより順序立てて話をしなくてはならないことがある・・・六道仙人は知っているか・・・？」

「ええ、今でいう忍術を広め、十尾の人柱力になり、自分が死ぬ寸前に十尾を九つの尾獣に分け、月を作り、そこに封印しただっけ？」

「そうだ、その話には続きが存在する・・・仙人は余命幾ばくかの状態のときに自分の後継者・・・つまり・・・二人息子にその話を持ちかけたんだそうだ・・・兄は世界平和には力が必要だといひ・・・弟は愛が必要だと言った、それを聞いた仙人は弟を選んだそうだ、それを聞いた兄は納得がいかず、弟に闘いを申し出た、しかし、弟に惨敗し、弟のもとを去ったんだそうだ、その兄弟は、後に有名になる・・・うちは一族と千手一族だ」

「え？どっち？」

「えつとね、兄がうちはで弟が千手かな」

「ふーん」

「で、時代は戦国時代にと移るわけだ・・・今よりも争いが絶えなく、ある国主がうちはを雇えば敵対する国主は千手を雇うといういたちごっこが続き、ほとんどの者達が疲れきっている所に、初代火影となる人が火の国に木の葉隠れの里を作るためにうちはに停戦を持ちかけ、うちは一族も疲れきっていたため協力しようということになった、しかし、初代とうちは一族の意見の対立からマダラは里から去ったが、九尾を従え、里を襲った、そのとき初代が勝利を収め九尾を得たが、また同じようなことが起きるのを防ぐため、遠い親戚で同盟を組んだ渦の国から九尾を封印するための器を無理やり連れて来たんだ」

「え？ということは・・・？」

「そう考えている通り・・・千手一族の遠縁に当たるんだ、その器の名前はうずまきミト、初代の九尾の人柱力に当たり、初代火影の妻であった人だ、そしてそのミト様の後釜として無理やり連れて来れた人が・・・」

「もしかして、うずまきクシナ？」

「そう！その通りよ」

「今日はもう遅いから、この話は今度にしよう」

「そうね、朱音・・・この話は信用が出来る人以外言いふらさないでね」

「え、はい」

「「お休みなさい」」

今日は疲れたので熟睡出来たが、あの話のことが頭から離れられなかった。

「おはよう」

「遅い！」

「あいつより遅いとはどういうことだ」

「ええゝ嘘、ショックー！」

「まあまあ、三人ともさっさと任務始めるぞ」

しかし、あまり集中出来なく、膝小僧をすりむいてしまった。

私は普段あまり怪我をすることがないので班員二人は驚いていた。

そして解散の号令がかかったと同時に二人が寄って来た。

「なあ、朱音・・・今日どうしたんだ？」

「そうだよ、僕たち仲間じゃない・・・悩みなら相談に乗るよ」

二人とも良いチームメイトだと思うけどこの話をしても良いだろうか。

しかし、知ってもらいたい気がするので話すことにした。

「うーん、じゃあさく結界作って」

「ああ、分かった」

結界を組み終えた後話し出した。

「あのね、七色の宝珠って話知ってる？」

「ああ」

「その話って実話だったんだって」

「は？」

「で、私の一族が関わっているらしいの・・・このことは他言したら駄目よ」

「・・・はあ・・・分かった」

昨日の話を全てし終えたとき、ハジメは涙を見せ、ツトムは納得した顔をしていた。

「・・・ひ、ひ、ひどいつて・・・」

「入って自分と違うものって排除したがるし、それにしても・・・胸糞ワリイ！」

「この話は続きがあるみたいだから、また話されたときに話すよ！くれぐれも内緒ね」

「ああ」

私達は四代目の顔岩を見ていた。

「・・・どうか、ナルトに幸せを」

第2話 崩れゆく夢（前書き）

手が冷えていつもより打つスピードがおそくなってなっています。
* 未来では朱音視点で過去では人物視点が多くなります *

第2話 崩れゆく夢

「先生！大変です！」

いつも冷静ながカカシ破壊する勢いでドアを開けた。

「ん！カカシ……ドアを壊さないように開けてくれる？」
「す・すいません……」

しかし、いつも冷静なカカシがこのような行動をしたことにとてつもなく嫌な予感がした。

「あ・あ・あ・あの……」

「ん！早く用件を言つてご覧……」

「はい、クシナさんの故郷が何者かによって滅亡しました」

僕は手に持っていた書類を落としてしまった。

そう僕は事件が起きる事を知りながら何も出来なかった。

それに僕は四代目火影で木の葉を守り導く柱でもある。

カカシは僕を心配なようすで先程から挙動不審な行動をしていたが僕を呼ぶ事にしたようだ。

「先生……？」

「ああ、ごめん・・・ん！やっぱり思ってたね」

「どういことですか」

「ああ、カカシならいいか・・・とある方から予言を頂いたんだ、その内容があまりにも先行きが良くないことばかりだったからさ、信じたくなかったんだ、

でも現に渦の国滅亡事件が起きたからね」

カカシは書類を僕に渡しながらかう言った。

「そうだったんですか・・・ん、・・・その話からすると続きあるでしょ、聞かせて下さい」

カカシが頼もしくなったことを嬉しく思いながら、その話を全て話した。

それを聞いたカカシは余りの悲惨な内容に涙を流した。

「・・・ど・・・どうして・・・先生の子供が余りにも可哀想でしょ、でも俺に出来る事があつたらやらせて下さい」

「ん！ありがとうカカシ」

そう、もうこついうやり取りが出来ないとお互いに確信してしまつた。

その確信は的中し、九尾事件が起きてしまい僕はこの世から去つた。でも、僕らの子“ナルト”は何があつても強く生きていくと信じている。

だから木の葉を・・・これからの未来を頼んだよ！

ナルトへ

この手紙を読んでいる頃は僕とクシナは側にいないだろうね。

まずナルトに謝らせて下さい。

一人にさせたこと、へその緒があつたところに九尾を封印したことです。

そしてたくさんの辛い思いをさせたと思っけど僕とクシナの子だからどんなことにでも乗り越えていくことを信じてます。

自己紹介が遅れたからここに書いておきます。

僕は四代目火影こと波風ミナトでナルトの父親です。

先程から言っているクシナという人は渦の国出身の女性でうずまき一族、成宮一族の末裔です。

成宮と名乗るはとても危険なのでうずまきを名字にしています。

そうナルトの母です。

もし、御柱の大王に出会ったら宜しくとお伝え下さい。

あと、二枚目に時空間忍術“飛雷神の術”を分かりやすく書いておきましたので使ってね。

もう時間がないけど僕とクシナはナルトのこと愛してるよ。

。。。。年10月10日

四代目火影 波風ミナト 四代目火影妻 うずまきクシナ

第2話 崩れゆく夢（後書き）

うん、やっぱり難しい部分が多いかな・・・、言い回しものすごく悩むしね。

第3話 火影と御柱の大王（前書き）

3話です！

話の展開が原作とある程度一緒なので宜しくです。

第3話 火影と御柱の大王

ワシは三代目火影・・・四代目が命と引き換えに九尾を封印したために忙しい日々を過ごしている。

今、目の前に空中に浮かんでいる少女と目が合った。

それは、木の葉に災厄を起こすことを知る者であった。

とりあえず執務室に入室し頂き椅子を用意させた。

「初めましてでいいのかな、私は御柱の大王、三代目とうちは以外
の名家、旧家の当主に用があつて参りました」

そのものを一度四代目に聞き、あまりにも忙しいので顔を見せる
ことがほとんどないと言っていた。

そのものが現れたことに大変驚いた。

「・・・火影様、大変面白い表情になつてるけどいいのかな」

その言葉に現実に戻された。

「ああ、すまん、すまん、四代目にあまり人前に出ないとお聞きしたものでな」

「それは、確かにそうですが・・・あまり人間界に介入しないようにしているだけけど、

それより今それどこじゃない危険が未来に迫っているのを教えてあげようと思ったのにいいのかな、

それとナルトにもものすごく関係ある話だけどいいのかな」

「何じゃと・・・誰か・・・すぐにうちは以外の名家旧家の当主をここに」・・・あ・・・それとナルトを預かりたいけどいいかな」

「・・・それは・・・」

「このままナルトが安心ですという保証はないのですよ、

それに木の葉だけで対応出来ない問題がたくさん出ているのにほっておくとそうおっしやているようにしか聞こえない、

ナルトは生まれながら過酷な人生強いられる、

今は序章にしか過ぎない、それでナルトが死ぬことになったら、あなたは四代目に顔向け出来ませんよね、三代目」

その鋭すぎる言葉にワシの無力さを責めているように、そしてナルトの人生の過酷さがこれから増すのに大変悲しくなった。

「・・・あい、分かった・・・ナルトをここに・・・」

「減口令をしきたいのじゃがどこまでじゃ」

「それは性別、実力、両親、九尾でしょ、そのくらい分からないかな」

「分かった、この話が終わったらナルトを預けることにしよう」

ちょうどタイミングよく執務室のドアをノックする音が聞こえた。

「入ってきなさい」

「…………失礼します…………」

「はじめまして、御柱の大王と申します、あなた方と火影様に木の葉の未来に起きる危険を前もって教えておこうと思ってお集まりいただきました」

「火影様、こいつなんですか……得体の知れないもの……」

「やめんか、御柱の大王……部下が大変失礼な発言をしてしまい申し訳ありませんでした」

「火影様！何も……」

そこまで言葉を発すれば発するほど殺気が濃厚になって息をするのが難しくなってきた。

「黙れ！このものは神様だ、ワシらが勝つわけなどない」

「……………神様……………」

「三代目、この場ではささない下さい、ダンソウやあまり関わりたくない奴らに目をつけられてナルトを殺そうとする奴らが増えますから」

その言葉を聞いてなぜナルトが出てくると疑問が出てくる。

「まず、ナルトの両親は四代目とうずまきクシナです、それにうずまきクシナ様はうずまき一族、成宮一族の末裔ですが今のところ知られていません」

「なんじゃと・・・それはものすごくまずいことになりそうじゃ」

「ええ、その件についても減口令をお願いします」

「・・・・・・はあ・・・・・・」

「でもこれからの話はあまりにも残酷だよ、聞く覚悟出来るかな」

「・・・・・・お願いします」

その引き締まった表情が崩れるのを予想しながらその話をされた。

しかし、あまりにも悲惨な内容に皆言葉をなくしているようだ。

そこへ暗部がナルトを御柱の大王に手渡した。

「では、三代目・・・ナルトは預かっていきます、いいかな」

「ああ、頼む」

「ああ、そうあなたたちに言うておくけど今の実力で安心しない方がいいよ」

さらりと恐ろしいセリフを言っていた彼女に皆凍りついた。

第3話 火影と御柱の大王（後書き）

ようやく3話です。

第4話 束の間の平和（前書き）

あと1話UPしたらまた・・・メモに書きださなくては・・・。

第4話 束の間の平和

私は御柱の大王、一番好きなものはプリン、嫌いなものは特にないけど

あえて言うなら嘘つきと裏切りかな。

ナルトを預かってから何年か経つけど・・・まあ、子育てって大変かな！

今は呪術、忍術、神術を教え込んでナルトは全てマスターしたけど私としては物足りないのよね。

あつ、私のとつて置いたプリン隠れて食べてる・・・許さない！！

「ね・ねーさん」

「何かな？・ナルト・・・」

「それより、私が取って置いたプリン知らないかな？」

「・・・え・・・し・・・知らないってば」

「嘘はよくないよ・・・嘘は・・・」

「嫌だな・・・嘘なんかついてないってば」

「ナルト・・・曼荼羅鏡を見て来ようかな・・・」

「ご・ご・ごめなさい・・・許してってば」

「いや・・・呪術、神術、忍術を全て総復習してもらおうかな・・・

もちろん逃げようなんて思わないでね」

「はいってば」

ふふふ・・・ナルトは本当にいい子なんだけどたまに私のプリン食

べるのよ。

私にかまって欲しくてやっているみたいだから可愛いんだけど。

しばらくして私が仕事を片付けているとナルトが近づいてきた。

「ねーさん・・・俺さ・・・前にねーさんが話した木の葉に行きたいってば」

「んーなんでかな・・・」

「だって・・・俺が生まれた場所を見てみたいってば」

私は溜息をついた。

いつか言われるのを分かっていたからだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ナルト・・・貴方には一度話したことがあるわよね・・・」

「もしかして・・・九尾の事だつてば・・・？」

「ええ」

「木の葉の人々のほとんどは九尾を憎んでいるわ、それでナルトの中に封印されていることも知っていて、

ナルトに辛くあたるわよ、それでも行きたいかな？」

「うん、それでも生まれた場所だし・・・それに皆に認められるまで頑張ればいいんだつてば」

「分かったわ、そこまで言うなら明日行きましょ」

「分かつてば・・・お休みっ!!」

私はナルトの後ろ姿を見ながら微笑んだ。

ナルトが見えなくなると同時に朱雀を呼んだ。

「御呼びでしょうか・・・御柱の大王」

「ええ、紅蓮・・・今から木の葉に行ってこれを届けて・・・それから三代目に宜しく伝えといて・・・」

「はい、確かに承りました」

早速、紅蓮は木の葉に飛び立った。

一方、木の葉では・・・

「やれやれ、ようやく仕事が終わりそうじゃわい、仕事を終えたら温泉にでも行こうかの」

「火影様、目の前の仕事が終われば早く行けますよ」

「そうじゃのう・・・ん!!」

「どうかしましたか」

「窓を開けてくれんかのう」

「いいですけど・・・」

火影側近が窓を開けた瞬間、赤い鳥が入って来た。
側近は腰が引けてしまっていた。

「初めましてで宜しいでしょうか・私は紅蓮・御柱の大王に仕えるものです」

「ああ、御柱の大王の・・・で・用件があるのじやろっ」

「ええ、こちらをお受け取りください」

火影様はその場で巻物を開き、笑顔になった。

「紅蓮殿、受けたまわりましたとお伝えください」

「ええ、主人から三代目に宜しくと言っておりましたし、急にこちらに伺うのは迷惑ではないでしょうか」

「いや、そんなこと思っておらんよ、いつでも来るがよい」

「ええ、では失礼します」

紅蓮は来た場所から飛び出しすぐに見えなくなった。

側近はようやく通常の状態に戻ったが、火影様の機嫌がいつもより良かったので仕事を切り上げることにした。

「では、私は先にあがらせていただきます、お疲れ様です」
「お疲れ様」

火影様は独り言を呟いた。

「ナルトに会うのは何年ぶりじゃのう・・・確か・・・今は5歳ぐらいのはず」

その独り言をいつのまにか外にいた自来也に聞かれていた。

「じじい、そのナルトっていうのは・・・」

「久しぶりじゃのう・・・自来也・・・ナルトは四代目の子じゃ・・・」

「明日、木の葉に帰って来ることになったんじゃが・・・のう」

「じじい、わしもナルトを見たいから見に来るぞ」

「ふん、勝手にせい」

その表情は二人とも笑顔であつた。

そして、翌朝正門が開いたとたん御柱の大王とナルトが姿をみせた。

「木の葉って初めてだつてば」

「うん、火影様のところに行こうね」

「うん」

第4話 束の間の平和（後書き）

後、1話UPしたら、一段落だあゝ！

第5話 始まりの歌（前書き）

やっと一段落・・・ふう・・・甘栗むいちゃいましたが無性に食べたくなった。

コンビニにLET'S GO!

第5話 始まりの歌

初めまして、俺ってばうずまきナルト。

俺が初めて我が儘を言ったら嫌がる素振りを見せず

木の葉に連れて来てくれたねーさん。

知らない人ばかりでとても緊張しているけど

今日の前にいる人が火影様みたいだってば。

「お久しぶりでいいのかな、三代目」

「そうじゃのう・・・これ、そこで聞くより姿を見せよ、自来也」

「はぁ・・・爺・・・」

「初めまして、自来也さん、御柱の大王と申します、ナルト・・・挨拶は？」

「初めまして、うずまきナルトだってば」

ねーさんは頭を撫でてくれた。

側にいる大柄な男の人は自来也という人らしい。

「ところでこちらには戸籍はあるんじゃないが、まだ住まいがのう・・・」

まあ、昨日の今日に言ったようなものだからすぐに用意出来ないのも仕方ない
と思うつてば。

「では、そこにいる自来也さんと旅をしてみteどうでしょう」

「おお、それがいいじゃろう、自来也・・・頼んだぞ」

「では、今からナルトに私の記憶を封じてもいいですか？」

「・・・え？・・・ねーさん！！という事だつてば？」

「・・・ナルト・・・私は人間じゃないって知ってるよね？」

私は人間たちの過去や未来をある程度知ってる・・・

あなたには役割というより使命があるの・・・それは世界を揺るがすことに繋がるし、または世界の崩壊を意味するのかもしれない

だから、きちんと自分の足で一つずつ噛み締めないと駄目よ
それにあなたの力や私の力を狙う人は腐るほどいるから・・・
だからよ」

俺はねーさんと一緒に生活してきたから性格を理解している。

ねーさんは決めた事を絶対に曲げない。

「分かったつてば、ねーさん」

「ごめんね・・・ナルト」

ねーさんは俺をソファに座らせ昏睡状態にさせた。

そして記憶を改竄した。

しばらく話の内容を聞いていた自来也が私に問う。

「ちょっといいかのう、ナルトの使命とは何じゃ」

「あなたは七色の宝珠という神話を御存知ですか？」

「確か・・・七色の魂を持つ子は

火、水、土、雷、風を自由に操り、

木、火、土、金、水を担う番人と共に

世界の命運の定めを握る話だったと思うが・・・

それが何かのう」

「話はあるてますがそれがナルトなんです」

「何じゃあとう！！！」

「すいません、もう少し静かに話せないかな」

「ああ、すまんのう」

「はあ〜と言う訳でナルトを宜しくお願いしますね」

「……はあ〜……分かったわい」

「では、御機嫌よう」

風のように彼女は消えて行った。

「……爺、じゃあ、わしはナルトを連れて里を出るからな」

「分かったわい」

三代目は煙管を吹かしナルトの行先を案じていた。

第5話 始まりの歌（後書き）

少しの間更新お待ちください。

第6話 アカデミー入学（前書き）

今回の出来はちょっとどうかって部分があるので後で何回か編集し直します。

第6話 アカデミー入学

五年ぶりにナルトが木の葉に帰って来ると自来也から連絡があり、

今日、帰ってくる予定らしい。

先程、門番から自来也が帰って来たと報告があった。

丁度、事務作業を終えた時、ドアのノック音が聞こえた。

「入れ」

そこには一際、綺麗になったナルトがいた。

「久しぶりだのう」

「だだいま、じいちゃん」

「おかえり、ナルト」

「久しぶりだな、爺」

「久しいな自来也、相変わらずだのう、おまえは……」

「どうじゃった自来也との旅は？」

「……うん……有意義だったけど……エロ仙人が……」

「エロ仙人……?」

「これ、その呼び方はやめろと言ったじやろうが!」

ナルトも面白いあだ名をつけるものだと感心してしもった。

「……ッ……ククク……これほどぴったりなあだ名はないじやろうよ、自来也」

「そうだってば、……だって女湯……頻繁に覗いてた」

「はあ、説教は後ですとしてナルトの実力はどうじゃ?」

後で自来也にはきつい説教くれてやるとして、まずは、ナルトの事じゃな。

「忍術は暗部以上、体術は下忍、武器の扱い方は上忍並、他にも呪術、神術、血継限界、を使いこなすが、幻術、頭脳面だけはからきし駄目じゃな」

「・・・エロ仙人・・・それってば・・・俺のことバカにしてる？」

「何じゃ、ようやく分かったのか」

「・・・キィー・・・ムカツク!!」

自来也ももついい年なのにあんなで子供の喧嘩のようじゃ。

「というよりナルトは一般常識を知らなさすぎる! よって教えてもらうように!」

その言葉を発した途端、部屋が静寂になっててもうた。

「どうするのじゃ、……自来也……」

「どうするって……どこかの一族に預けるとか？」

このことをナルトの前で苦痛で仕方ないが現状を把握し、回避するようにもらいたい。

「はあ〜どこの家もナルトを嫌がっておるぞ、

ただうちは一族だけは分らん」

「だったら、うちは一族だけに性別を公開して

一般常識を教えてもらうことにしたらどうじゃ」

「しかし、あそこは今……」

ナルトのいる前でうちは一族がクーデターを起こすなんて口が裂けても言えない。

しかし、ナルトから出た言葉に驚愕した。

「じいちゃん、いいよ・・・うちは一族で何が起きているのかわかってるから」

なぜそのことが分かるか疑問に思ったが、すぐに答えを言ってくれた。

「草花が教えてくれるってば、

それに形あるものはいつか地に帰ると思ってるし」

ナルトはワシが思っている以上成長しているかもしれない。

「あい、分かった、・・・夕顔、うちはフガク、ミコト両名をここに、

そしてここで聞いたこと口外しないように」

「御意」

あいつらが来る前にアカデミーのことを話さなければならぬ。

「・・・ナルト・・・お前にはアカデミーに入学してもらわないといけない

よって、これから色々条件を付けてもらうが、良い・・・

まずは、性別を里の者に知られてはいけない、

次に、全ての実力を今から偽れ、分かったな」

「うん、分かったってば・・・私のためなんでしょ」

ナルトに無理強いばかりするワシを許して欲しい。

引き出しから出した女物の洋服、下着を渡した。

「これは、ワシからのプレゼントじゃ」

するとナルトは笑顔でありがとうと言った。

そこにうちは夫妻が入室してきた。

「・・・・・・・・失礼します・・・・・・・・火影様、御用でしょうか」

「ああ、ナルトを預かってもらいたい、

そして一般常識や礼儀を教えてもらいたい」

「あら、あなた・・・・・・・・クシナちゃんの娘さん？」

「母ちゃんを・・・・・・・・母ちゃんを御存知なんだってば？」

「ええ、強烈な人だったもの、あなた、私は預かりたいです、
いいですね」

「お前がいいなら、よかるう」

「といわけでお預かりしますね・・・火影様」

「ああ、ナルトを連れて下がると良い」

ナルトを連れて下がって行った。

数日後・・・ナルト達、新入生は入学式を迎えた。

第6話 アカデミー入学（後書き）

フウ〜!! ようやく更新です。

第7話 ナルトの過去（前書き）

大変更が遅くなり申し訳ございません。でわ、第7話ナルトの過去どうぞ！

第7話 ナルトの過去

（朱音視点）

「朱音」

「ん、何？」

「今から甘栗甘に行こう！」

「いいよ！ツトムも行こうよ！」

「ああ」

皆様、お久しぶりです。

朱音です。

先程、長期任務から帰ってきたんです。

久しぶりに甘栗甘に行って自分の意見を聞いてもらうの。

「おい、着いたぞ！何考え事してんだ」

「あー、ごめん、ごめん、」

「で、話って・・・？」

「七色の宝珠の話したでしょ？そのあと実はね、こんなもの見つけたの」

「ふーん・・・って・・・ええええ」

「うるっさい、ハジメ黙れ！！」

「ひいひい！！すいません」

「では仕切り直して！」

屋外の見晴らしのいい席に座り、店員を呼んだ。

「すいません」

「はい、御注文ですか？」

「みたらし団子3つ、あとお茶つけて」

「かしこまりました」

数分で注文したものがきた。

「おまかせしました、ご注文したみたらし団子3つとお茶になります」

「ありがとうございます」

ようやく店員が下がったところで結界をしいた。

「気になったんだが、それは何だ」

「えーナルトさんが残した日記」

ハジメとツトムが飲んでいた茶を噴出した。

「おい！かかったらどうすんの！」

「「ああ、悪い」」

「まあいいか、ナルトさん…レイという人と仲良くしていたころの話が書いてあって……その内容が悪魔の部下を使ってレイさんを目の前で殺したんだって、そのショックで感情を忘れてしまったんだって

……で何年もそのことで夢で魘されていたんだって、でさ、思ったんだけど……」

二人は乗り出してきた。

「何、何？」

「人柱力ってさ…碌な目にあってないと思わない？」

「まあ、確かにな！」

「で提案なんだけど……人柱力をなくす運動してみない？」

「まあ、その意見に俺も賛成だな」

「俺も」

そこに声をかけるものがいた。

担当上忍だ。

「お前ら何してんだ？」

朱音が持っていた日記を取り上げ軽く読んだ。

「朱音、おまえ……これ……七色の御子……初代の日記じゃないか……」

「『先生』」

「先生……初代って？」

「七色の御子は……七人の守護者を従え、世界を導いていく、ただ、それに追加すると世界の存続や滅亡を選択出来る……何とも厄介な運命の枷を死ぬまで背負い続けるってことだ、めんどくせーことにな」

みんな重い枷を聞いて戸惑っているようだ。

「人間は歴史を学んでも何度も過ちを繰り返す、だから七色の御子が必要で尚且つ人間の体を変え何代も……だからいつか御子が滅亡を考えることもあるしな……それよりも

お前ら人柱力の話してなかったか？」

「はい、しました」

「やめとけ」

「はい（！？）」

「お前らの考えることはだいたい分かる、人柱力をなくそうと運動するつもりだったんだろう、

そんなことをやったら忍びをやっていけなくなるし、それに尾獣を悪用しようとするやつが蔓延って

いる組織がまた出来るかもしれない、だからやめることが出来ないんだ」

「でも、そうやって人間を道具に仕立てていいんですか！」

「そう、思う人がいてもおかしくないと思う、ただこれは上層部の決定だから…覆すことが出来ない、それよりも明日11時に第7演習場に集合するようというわけで家に帰れお前たち」

そのあと、みんな無言で帰途についた。

人に尾獣を封印される運命を悲しく思った。

第7話 ナルトの過去（後書き）

更新はこれから不定期になります。

第8話 うちは一族滅亡（前書き）

時間が空きましたのでUPしてみました。

第8話　　うちは一族滅亡

「ナルトや、今日はワシのところに泊るのじゃ」

アカデミーから預かりとなっている家うちは家に帰宅した途端、火影のじいちゃんから御呼び出しされた。

と・泊りって・・・・・・・・・・・・・・・・

まさか・・・・・・・・あの事件が起きるという事？

「・・・・・・・・・・・・・・・・じいちゃん、分かってるからもういいってばよ」

そう私は、ある程度未来を分かっている。

うちは一族がクーデターを起こそうとしていること

そのの実行犯がイタチとマダラを名乗る男だということを

「そうか・・・・・・・・もしかして・・・ワシがどうやって死ぬのも分かっているじゃろう？」

「そ、それは・・・・・・・・」

「よい、よい、意地悪な質問をして悪かったなナルト」

じいちゃんの悲しい表情に自分の運命を呪いたくなった。

「・・・じいちゃん、たった一つだけ頼みを聞いてくれれば」

じいちゃんは、笑顔になり、頼ってくれたことに喜びを感じているようだ。

「うちはイタチに会わせて欲しい」

「それは・・・駄目じゃ」

「じいちゃんが考えていることはしないし、忠告と九尾事件の事を話すだけだってば」

「そうか、ならワシ立ち合いのもとなら許可しよう」

「ありがとうだってば、じいちゃん」

そして、深夜・・・

誰もが寝静まった頃・・・

「火影様、任務完了いたしました」

「御苦労、これより、おまえを抜け忍と扱い、暁に潜入任務に入ってもらおう、」

追忍は出さないことにする、それでサスケの事はどうするのだ」

「…それは、自分を憎むことでいきてもらいます、それとサスケのことを里の上層部から」

守って下さい、お願い致します」

「……そうか、さてイタチやおまえに話があるというものがある」

そこに私が姿をみせたら、目を大きく見開いていた。

「…ナルト、どうしてここに…」

「時間がないから手短に話すってばね、あの事件はマダラを名乗るあの男が万華鏡写輪眼で」

母の封印を解き、九尾を操り、里を襲わせた、このことはほとんど知らないが初代火影の妻と

私の母は九尾の人柱力でうずまき一族だった、しかも本人の意思と

は関係あらずに勝手に

決められ木の葉に連れて来られた、マダラのせいでね」

イタチの瞳は一族に対する失望とマダラに対する憎しみの目だった。

「……………大変申し訳なかった、本家の長男として詫びを入れさせてもらう、

そしてマダラが生きていることに対して何も知りも確認も出来なかった一族を恥に思う…」

「いいってば、それより…サスケのことどうするんだってば…………

このままだとマダラ名乗る奴の操り人形にさせられるってば」

「…………大丈夫だ、俺はサスケも君の事も信じている、ではさよならだ」

その後ろ姿が無性に胸に込み上げて来るものがあって泣き疲れて寝るまでそこに止まっていた。

第8話　　うちは一族滅亡（後書き）

最近、同人誌巡りにはまっています。

今一番お勧めなのはアガルタ焰シリーズ（ファンタジー）連載中ですが、

あれは話の展開、文章もとても好きなんですネ。

第9話 アカデミー卒業（前書き）

お久しぶりです。2話更新します。

第9話 アカデミー卒業

「姫！！元渦の国に御戻り下さい！」

ナルトはその人に目を伏せて言った。

「御帰り下さい、私は今ここを離れるワケにはいかないってば！」

「姫…我等は…姫を思って…」

「今日は遅くなるから留守番お願いってば」

「姫……」

ナルトはアカデミーに行った。

「おはようナルト!」

「ミズキ先生…おはようだったば」

「ナルト君…今日の放課後空いてるかい？」

何か悪いことしたかと頭の中を巡らしたがなかったため思考の中から現実の世界に戻った。

「何もないですけど…どうかしたってば？」

「ナルト君に手伝って欲しいことがあってね…火影様の所に行つて封印の書を持って来て欲しいんだ、頼めるかな？」

「いいですよ」

「じゃあ、夜にね…」

ナルトは早く帰宅し、ミズキが封印の書を狙っていること、自分を殺すついでに里抜けすることを話した。

三代目は黙って聞きナルトに極秘任務を渡した。

「ナルトよ、ミズキを確保し、後で遣いにやる暗部に引き渡せ」

「御意」

“ドンドン”

扉の叩く音に我に返り、扉を開けた所にミズキの顔があつた。

「どーしたんです?。」

「火影様の所に集まって下さい!!どうやらナルト君がいたずらで封印の書を持ちだしたらしくて」

その言葉に驚愕した。

火影邸では――

「いたずらじゃすみませんよ!火影様!!」

そーだ、そーだと声を高々に挙げ暗殺を仄めかすものたちが多かった。

「うむ！初代火影様が封印した危険な書物じゃ、使い方によっては恐ろしい事になりかねん…、書が盗まれて半日以上経っており、急いでナルトを探すのじゃ」

一方ナルトはと言うと――

森の中にある一軒家の封印の書を読み終わっていて全て覚えてしまっていた。

そこに・・・

「……見つけたぞコラ！！！」

ものすごい剣幕で森の中に怒号が響いた。

「イルカ先生…？」

「ばっかもーん！！……イルカ先生……？じゃないだろうが……お前自分のしたこと分かってるのか…？」

その問いにナルトはヘラリと笑ったままだ。

「だってさ、だってさ、ミズキ先生に頼まれたんだってば」

「…」

イルカ先生は何かを感じ取り、ナルトを突き飛ばし、攻撃を受けた。

「よく、ここが分かったな」

「なるほど…そういうことか…」

ナルトはミズキが来るのを待っていた。

「ナルト、巻物をよこせ」

「駄目だ！ナルト！その巻物を渡すな！」

体中に刺さったクナイを引き抜きながら叫んだ。

「えっ…？」

「それは禁じ手の忍術を記して封印した危険なものだ！ミズキはそれを手に入れるためお前を利用したんだ！！」

イルカの言葉にナルトは静かにミズキの方を向いた。

そして、口元を歪ませて言い放った。

「ナルト…お前が持つていても意味がないのだ！ 本当のことを教えてやるよ！」

「……バ、バカよせ……」

ミズキが言おうとしたことが分かったイルカは声をあげて止めようとした。

しかし、ミズキは容赦なく言った。

「12年前…化け狐を封印した事件は知っているな」

「ああ」

「あの事件以来…里では徹底した……あ……る……掟……が作られた」

ナルトは冷めた目でミズキを見た。

「しかし…ナルトお前に……だけ……は知られることのない掟だ」

その場に一時、静寂が訪れる。

「ナルトの正体が化け狐だと口にしない掟だ」

ナルトからだんだん表情が抜け落ちてきたのを嘲笑うかのように言い続けた。

「つまりお前がイルカの両親を殺し― 里を壊滅させた九尾の妖狐なんだよ！！お前は憧れの火影に封印された拳げ句―」

「やめろー！！」

「里のみんなにずっと騙されていたんだよ！！ おかしいとは思わなかったか？ あんなに毛嫌いされて！」

ミズキの言葉に、ナルトの脳裏に自分を冷たい扱いをする大人たち

の顔が次々に過ぎる。

「イルカも本当はな！！ お前が憎いんだよ！！」

ミズキは背中 of 風魔手裏剣を回し始めた。

「！！！！」

逃げようとするナルトの表情を見たイルカは言葉を失った。

「お前なんか誰も認めようとしなない！！！！」

それでもミズキの人を馬鹿にした笑いは続いた。

「それはお前を封印するためのものなんだよ」

“ ザク・ザク ”

刺さった音がした。

「ぐ……」

「先生……？」

自分のせいで誰かが死んだり怪我したするのが嫌なナルトはイルカ先生が怪我している事に少し混乱しているようだ。

「何で……なんで……」

「……オレなァ……両親が死んだからよ……誰もオレをほめてくれたり認めてくれる人がいなくなった。……寂しくてよォ……。クラスでよくバカやった……人の気をひきつけたたかったから。優秀な方で人の気がひけなかったからよ。全く自分っていうものが無いよりはマシだから、ずっとずっとバカやってたんだ。………苦しかった」

イルカ先生は大粒の涙を流した。

「そうだよなあ…ナルト…さみしかったんだよな…苦しかったんだよな」

「ごめんなあ…ナルト…俺がもっとしっかりしてりゃ、こんな思いさせずに済んだのによ」

その言葉にナルトは背を向け逃げた。

「ナルト!!」

「クククク 残念だが、ナルトは心変わりする様な奴じゃねえ。あの巻物を利用し、この里に復讐する気だ。さっきのあいつの目を見たら!? 妖狐の目だ!」

「ぐっ…」

ミズキの言葉に齒軋りしたイルカはすぐに背中に未だに突き刺さっている手裏剣を無理矢理抜いた。

傷口から血がドクドクと流れ出る。

だが、それでもイルカは立とうとする。

「…ナルトは…そんな…奴じゃない…」

「まっ！ そんなのはどーだっていい。ナルトをお殺して…あの巻物さえ手に入りやそれでいい！ お前は後だ！！」

ミズキは言い残してナルトを追いかけて行っただ。

「ぐっ！！」

傷ついた体を無理矢理動かすイルカは、ミズキの後をすぐに追った。

「フッフ…」

変化が解ける。

「イルカはオレだ…」

ナルトがイルカになった。

どうやらイルカ本人だからこそわかるのだ。

「……………なるほど…」

それに納得するミズキは静かに立ち上がる。

そして離れた所の木の陰にはイルカと入れ替わった本物のナルトが巻物を持って隠れていた。

「ククク…親の仇に化けてまであいつをかばって何になる」

「お前みたいなバカ野郎に巻物は渡さない」

「バカはお前だ。ナルトもオレと同じなんだよ」

「?…同じ?」

ミズキの言葉に意味がわからない顔をするイルカ。

ナルトは静かに気配を消して聞く。

「あの巻物の術を使えば、何だって思いのままだ。あのバケ狐が力を利用しない訳がない。あいつはお前が思っているような…」

「ああ!」

ミズキの言葉を遮るように肯定の言葉を出したイルカに、ナルトは静かに眼を伏せる。

「バケ狐ならな、けどナルトは違う。あいつはこのオレが認めた優秀な生徒だ、…努力家で一途で…誰にも優しく、笑顔を向け、誰かに認めてもらいたいと願い…大人の陰口を聞いても笑顔でいる…」

…、あいつはもう人の心の苦しみを知っている……今はもうバケ狐じゃない、あいつは木ノ葉隠れの里の……うずまきナルトだ」

ポタツ…

イルカの言葉を聞いていたナルトの眼から止めどない涙が零れ落ちた。

「……………ケっ！ めでて——野郎だな」

ミズキは静かに背中に背負っていた最後の大きな手裏剣を取る。

「ぐっ！！」

イルカは動こうとするが、背中に受けた傷が痛み、血がドクドクと流れる。動きたくてももう動けないのだ。

「イルカ…お前を後にするつつたがやめだ…、さっさと死ね！！」

ミズキは手裏剣を思いっきり回してイルカに向けて投げようとした。

「（……これまでか）」

もう万事休すのイルカ。そしてミズキの手裏剣がイルカに向かった。

その時――

「け、結界だと!？」

だがイルカを守る結界の前に出て来たのは……

「もうこれ以上黙ってらんねーよ……」

そこに登場したのは見知らぬ青年達だった。

ミズキは逆上し、唾を飛ばしながら叫んだ。

「貴様ら何もんだ!」

「何で貴様の様な下等生物に話さないといけないワケ…なあそう思うだろう?。」

「「「「「まあな」「」「」「」

「たく、カツコつけすぎだあ、炎柱」

「う、うつせえ、白禧」

イルカは動揺しながらも尋ねた。

「あのう・・・あなたは・・・?。」

「軽く言えばナルト様の護衛している者ですが・・・
まあ、ナルトの事庇ってくれたようでしたし
多めに見ますか・・・」

「それよりもイルカさん下がって下さいます？あそこのゴミを始末
しなくてはならないからねえ」

と言いながらミズキを見ながら殺気を飛ばした。

その殺気を受けたミズキは泡を吹いて倒れた。

そこにナルトが木の陰から申し訳なさそうに顔を出した。

「・・・・・・・・ナルト様！！」

皆のすごい形相に後ずさりし始めたが、イルカ先生に腕を掴まれた。

ナルトは目配せをして鏡心にイルカに手当てを指示した。

そして、事件が終わり卒業試験を合格した夜、守護者達と森で話し込んでいた。

「いいですか、ナルト様！あなたはいつも人を信用しすぎるから危険に巻き込まれるんです！」

「まあ、それには俺達も意義なしだあ」

「・・・はあ・・・でも・・・助けられる命は助けたいってば」

「これだから姫様は・・・」

「・・・黄禧」

「まあ、その甘さを取ったら姫御子じゃねーよ」

「・・・黒禧」

そこにガサガサと音がした。

「貴様誰だ」

そう言いながら七人ともその人物の喉元に刀をつけた。

そこにはうちはサスケがいた。

「サ・サスケーエ？」

「何だよ、ドベ」

「まさか今の・・・」

「全部聞いてけど・・・何だよ」

その態度に炎柱が切れた。

「貴様・・・黙って聞いてりゃ・・・」

その言葉を遮るようにナルトが叫んだ。

「もう！やめてっば！！！！離してあげて！
サスケ、私が女であることを誰にも言わないでね！！！！ほら、早く
帰る」

七人の守護者は軽く殺気を投げつけながら文句を言っていた。

そして、帰ったサスケはつぶやいていた。

「……っ……ナ・ナ・ナルトが女……」

第9話 アカデミー卒業（後書き）

原作五六巻出ました・・・今ホントにシリアス過ぎるけど私の小説も負けず劣らずの感じになりそうです。

第10話 説明会（前書き）

非常に今の仕事精神的に疲れる・・・。

第10話 説明会

私は…これから先どうなるか知っている………だから人あまり接して来ないようにした……。

私の力を悪用しようと考えている輩もあまりにも多すぎてうんざりしている現状だ。

ああもうこんな時間……説明会に行かなくては……。

「ようーし今日も頑張っちゃおう!-!!」

私は自分たちつずまき一族に木の葉が強い事をはっきり言っ心にわだかまりとして残っているが、守護者の皆に薦められてこの説明会にいる。

「えー、これからの君たちには里から任務が与えられる訳だがー…」

イルカ先生の目を盗み欠伸をしながら聞いた。

「次、第七班…うずまきナルト、春野サクラ、うちはサスケ。」

やはり…夢で見たとおりだった。

ぎゃあぎゃあ喚くクラスメイトに呆れていた。

説明会を終えた途端、うちはサスケがいた。

「おい、話がある」

うちはサスケの態度にあまりにも腹が立って言い返した。

「はあ、俺はあんたと話すことなんて何も無いってばよ」

周りの女の子はサスケが私に話した事、事態が気に食わないようだ。

ナルトのくせに生意気だという声が聞こえている。

「じゃあこの場ではらしてもいいんだな…お前のことを」

「ふざけんな！やっぱり手前は記憶を消すか、存在を消すべきだったってば、誰もが貴様の言いなりになると思うな、もう一度同じことしたら死ぬよりも辛い目を味あわせてやる・・・覚えておけ」

私が教室を出た途端私への罵声や悪口がいつせいに聞こえた。

教室に戻ろうとしたとき春野サクラとうちはサスケを見かけた。

「そろそろ集合時間だ・・・ナルトのヤローはどこだ」

「まーた、またあ話そらしてーナルトなんてほっときゃいいじゃない!」

「サスケ君にいつも絡むばかりでさーやっぱりまともな育ち方して

ないからよ、アイツ！……………ホラ！アイツ両親いないじゃない！
」

その言葉にサスケは切れた。

それでもサクラの言葉続く。

「いつも一人で我儘しほーだい！！私なんかそんなことしたら親に
怒られちゃうけどさ！」

「いーわねーホラ！一人ってさあ！ガミガミ親に言われる事ないし
さーだから色んな所で我儘が出ちやうのよ」

「……孤独」

「え？」

「親に叱られて悲しいなんてレベルじゃねーぞ」

その言葉にサクラはおろおろするばかりだった。

「……………どうしたの急に……………」

初めてサスケはサクラに目を向けて話した。

「お前……………う・ぬ・い・よ」

ふーん、うちは何気にいい所あんじゃん、少し見直した。

私達の待っている教室には異様な雰囲気漂っている。

「もー！！なんで私たちだけ先生が来ないのよー！！」

1人ブツブツと文句を言うサクラに同意しながら黒板消しをドアの上の方に挟んだ。

腹いせにチョークの粉をたっぷりつけた黒板消しのトラップを作る。

忍者じゃなくても引つかからない古典的かつ簡単なトラップだけど、当たってくれるハズ。

「ナルトー！！あんた何やってんのよー！！」

サクラの言葉にニシシと笑いながらドアから離れて様子を見た。

ホラ、気配が近づいてきた。

ガラッ…

ドアを開けて頭から入ってきた銀髪の男に、黒板消しがモロに当たってその男の足元へと転がった。

あまりにも間抜けな光景だから鼻で笑ってやった。

「なんていうかなあ…お前らの第一印象は、嫌いだ!!」

「じゃあまず簡単に自己紹介でもして貰おうかな？」

場所が変わって屋外――

「どんなこと言えはいいの？」

「そりゃあ、好きなものとか嫌いなものとか、将来の夢とか趣味とか……いろいろだ……！」

「はいっ……それよりも先生が先に自己紹介するべきだってばよ。」

「そうねえ……見た目ちょっと怪しいし。」

私とサクラに言われてしゅしゅ紹介するみたいだ。

「俺は、はたけカカシだ。好き嫌いをお前らに教えるつもりはない
！！将来の夢って言われてもなあ……。趣味はいろいろだ。」

「ねえ、結局分かったのって名前だけじゃない？」

皆静まりかえってしまった。

「じゃあ次はお前からだ。右からね。」

「俺はうずまきナルト、好き、嫌いと将来の夢は教える気はない以上」

カカシ先生に目配せして次に行くように促した。

「次。」

「名はうちはサスケ。嫌いなものならたくさんあるが、好きなものは特にない。それから、将来の夢なんて言葉で終わらせる気はないが、野望はある。一族の復興と、ある男を…殺すことだ!!」

私はイタチに警告した・・・でもイタチの望む未来にはならないと知っているから・・・何とも複雑だ。

「じゃあ次、女の子。」

「私は春野サクラ。好きなものはあ……ってゆーかあ、好きな人は……えーとお……将来の夢も言っちゃおうかなあ……キヤー!!」

「「「・・・」」」

「嫌いなものはナルトです！」

私は恋って盲目って事を実感した。

「よし、自己紹介はそこまでだ。明日はこの4人だけであることをやる。」

サバイバル演習だ」

「相手は俺だが、ただの演習じゃない」

「なんで任務で演習やんのよ？ 演習なら忍者学校でさんざんやったわよ！」

サクラは軽く文句を言う。

「？」

「じゃあ、どんな演習だったの？ (わかっているけど……) 」

ナルトは一応質問した。

「……………ククク……………」

するとカカシが静かに笑い出した。

「ちょっと！ 何がおかしいのよ先生！？」

「いや…ま！ ただな……オレがこれ言ったらお前ら絶対引くから」

「引く??」

「卒業生27名中、下忍と認められるのはわずか9名、残りの18人はアカデミーに戻される。つまり、脱落率66%以上の超難関試験だ」

その瞬間、サクラとサスケは引いた。

だが、ナルトは首を傾げて不思議な顔をしていた。

「とにかく明日は演習でお前らの合否を判断する。忍び道具一式持つて来い。それと朝めしはぬいて来い………吐くぞ！」

吐くわけがないと思いながらナルトは軽くため息をついた。

するとカカシは三枚のプリントを差し出した。

「くわしいことはプリントに書いといたから。明日遅れて来ないよーに！」

そして帰ろうとしたときサスケが手首を持って強制連行された。

第10話 説明会（後書き）

今月と来月の分入れた更新つてやつです。

第11話 サバイバル演習（前書き）

大変お待たせ致しました！！

第11話開幕です！

どうぞ！

第11話 サバイバル演習

「やー、諸君おはよう」

やはりこの男は遅刻してくると思ったが4時間以上何て非常職だと声を大にして言いたくなった。

「「おつそーい！！！」」

なので叫んだ。

物事にふけているとカカシ先生が目覚ましを出し、三本ある真ん中の丸太の上に置く。

「よし！十二時セットok！」

ニヤニヤと笑いながら用意する姿に少し引いてしまった。

「ここに二つ鈴がある…、これを俺から昼までに奪い取る事が課題だ」

そう、私達の班は三人だから二つになる。

「もし、昼までに俺から鈴を奪えなかった奴は、昼飯抜き！あの丸太に縛り付けた上に目の前で弁当食うから」

「二つしかないから…必然的に一人、丸太行きになる。―で！鈴を取れない奴は任務失敗ってことで失格だ！つまりこの中で最低でも

一人は学校に戻ってもらうことになるわけだ…」

俺達の両側でサクラ、サスケは喉を鳴らせ何かを飲み込んだ。

ホント最悪な性格な持ち主が担当上忍になったもんだと内心溜息ついた。

「手裏剣も使っていないぞ、俺を殺すつもりで来ないと取れないからな」

「でも！！危ないわよ先生！！」

「そうそう！黒板消しのトラップも避けられねーほどドンクセーのにイ！！！！本当に殺しまうってばよ！！（消し炭にしてやるつか？）」

「

私の内心のココロの叫びを読み取ったカカシ先生に御愁傷様と言っていた。

「世間じゃさあ…実力のない奴に限ってホエたがる、ま…ドベはほつとして、よいスタートの合図で」

私は演技を強調するためにカツとなったフリをしてカカシ先生に殺気を送ったら顔色が真っ青になっていた。

カカシ先生はようやく正気に戻ったようで安心した。

「そうあわてんなよ、まだスタートとは言っていないだろう?」

「でも、ま…、俺を殺るつもりで来る気になったようだな…、やつと俺を認めてくれたかな？」

しかし、想いもしない言葉であつたので否定した。

「はあゝ？ 認めるワケないない！」

その言葉を聞いた一同は凍りついた。

「分からないってば？ 遅刻魔に言われたくないもんな！」

その言葉はトドメになったようで側にある木にノの字を書き始めた。

「先生、ウザイ……でもさー時間がないので始めようってば？」

「それもそうだね……ククク……何だかな、やっとお前らを好きになり
そうだ」

「じゃ始めるぞ……！……よーい……」

スタートの言葉と同時に三人が地を蹴った。

「いざ尋常に勝~~~~負!」

「あのさァ……、お前ちつとズレとるのォ……」

演技するの大変だねと視線で訴えられた。

そしてポーチから本を取り出し、読み始めた。

「忍戦術の心得その一、体術！！を教えてやる」

しかし、その本に啞然とした。

「・・・？どうした、早くかかって来いって」

「・・・でも・・・あのさ？あのさ？何で本なんか・・・？」

冷やかな目で見ているのを気づかないようだ。

「なんでって・・・本の続きが気になったからだよ、別に気にすんな・・・、お前らとじゃ本読んでも関係ないから」

「……そう……ならボロボロにしてもいいってば？」

ようやくここでカカシ先生は私の怒りに気づいたようだ。

「ひー！すいません」

そこに土下座したカカシ先生がいた。

数分してボロボロになったカカシ先生に私はこう言った。

「俺はこの試験の目的が分かってる……チームワークだろ？」

「はーあ、やっぱりナルトには分かっていたんだ」

「それにカカシ先生が監視だという事も知っているよ」

「それは……」

「分かってる、上層部の命令だつて」

私は上層部を心底毛嫌いしている。

「でも俺だけじゃ駄目だと思うから、さっさとやってね・・・先・生・・・ちなみに私は幻術でごまかしたから」

「ま、分かったから、じゃ行くね」

先生は二人のほうに行った。

「あぎやあああ
」

第七演習場に何とも言えない悲鳴が響いた。

サクラが幻術をかけられたようだ。

「ぎやあああゝ！！！今度は生首ゝイ！！！！」

「終わった？」

「まあね、それより聞きたいことがあるんだが・・・お前何者だ？」

「それってかなり失礼ですよ・・・ハタケカカシ上忍？」

カカシ先生の懷に飛び込みけりあげようとしたが逃げられ、目覺ましも鳴ってしまった。

「チッ、もう終了かよ？」

「まっ、そうだね、後でたっぷり聞かせてもらっからね？」

慰霊碑に向かった。

「おーおー腹の虫が鳴つとるねー君達」

ギョルギョルと鳴る二人――

「ところでこの演習についてだが、ま！お前らは忍者学校に戻る必要もないな」

「えっ！？それって三人とも……」

カカシの言葉にサクラが嬉しそうに言っている。

隣ではサスケが自信あり気に鼻で笑っている。

俺は冷めた表情でカカシ先生を見つめていた。

カカシ先生はその様子満面の笑みを張り付けて言い放った。

「……そう、三人とも…忍者をやめろ！」

その言葉に空気が凍りつく。

慌てたようにサクラが立ち上がり疑問をぶつけた。

「忍者やめろってどーゆーこと!?!
確かにスズは取れなかったけど、なんでやめろとまで言われなくちやなんないわけエー!!」

「どいつもこいつも、忍者になる資格もねエガキだつてことだよ」

冷たい口調で言う言葉にサスケが反応し、カカシ目掛けて走り出したが、カカシはかわさずにサスケを押さえつけた。

「だからガキだつてんだ」

「サスケ君を踏むなんてダメー！！！！」

「お前ら忍者なめてんのか、あ！？何の為に班ごとにチームに分けて演習やってると思ってる」

「え！？…どーゆーこと？」

わけがわからないとでも言うような表情のサクラに、カカシはヒントを出すもまだわからないとでもいうように答えを迫るサクラに溜め息をつく。

そんなサクラにチームワークと言い、さらに三人でくればスズを取れたかもなと続ける。

何かに気づいたのか、サクラが立ち上がった。

「なんでスズ二つしかないのにチームワークなわけエ？三人で必死にスズ取ったとして一人我慢しなきゃなんないなんて、チームワークどころか仲間割れよ！」

「当たり前だ！これはわざと仲間割れするよう仕組んだ試験だ」

「え！？」

驚くサクラを余所に、この試験のなかチームワークを優先できる者を選抜するのが目的だとも言った。

「それなのにお前らときたら………サクラ…お前は目の前のナルトじゃなく、どこに居るかも分からないサスケのことばかり、サスケ！お前は二人を足手まといだと決めつけ個人プレイ。ナルトは答えを知りながら大暴走………任務は班で行う！確かに忍者にとって卓越した個人技能は必要だがそれ以上に重要視されるのは“チームワーク”チームワークを乱す個人プレイは仲間を危機に落とし入れ殺す事になる…例えばだ………」

「サクラ！ナルトを殺せ。さもないとサスケが死ぬぞ」

「と...」になる

「はあ!?!」

「!?!」

すぐにサスケから退くとゆっくりと何か書かれた石に近づいてく。

その慰霊碑の説明をし、そこには自分の親友の名が刻まれていると言った。

「…お前ら…！もう一度だけチャンスをやろ。ただし、昼からはもっと過酷なスズ取り合戦だ！」

カカシは挑戦する奴だけ弁当を食べ、私には食わせるなとも言った。

ルールを破った時点で失格だと言い、睨みをきかせながらその場を離れていつてしまった。

さすがに目の前にある弁当を見てお腹が減ったのか腹の虫が鳴った。

そんな様子を見て、サスケがスツ…と弁当を差し出す。

「ホラよ」

「え…」

私は不意をつかれたように驚きを隠せずにいた。

「ちょ…ちょっとサスケ君、さつき先生が!!」

「大丈夫だ、今はアイツの気配はない。昼からは三人でスズを取りに行く」

「サスケ…お前、」

「っ足手まといになられちゃ、こっちが困るからな／＼／＼／」

その様子を見てサクラは弁当を渡そうとした時――

「お前らあああ!」

「!」

「わあああ!」

「きゃあああ」

それぞれ後退ったり構えたりで警戒する

「うーかつく」

「え！？」

「うん？」

「……」

ニコと笑うカカシに反応に困る三人――

ハッとまずサクラが話を切り出した。

「合格！？なんで！？」

「お前らが初めてだ」

「え？」

「何のことだ？」

意味がわからないように首をかしげる三人…いや、三人にカカシは

言った。

「今までの奴らは素直にオレの言うことをきくだけのボンクラどもばかりだったからな。

………忍者は裏の裏を読むべし。忍者の世界でルールや掟を破る奴は、クズ呼ばわりされる」

カカシは優しい口調でナルト達と向き合った。

「………けどな！仲間を大切にしない奴は、それ以上のクズだ」

ポンポンと頭に手をやるカカシを睨むも、当の本人は笑顔のままだ。

パシッという乾いた音をたてナルトの頭から手が離れた。

「サスケ……？」

「……………」

「おい、なんだよ。おい！聞いてんのかよ離せてっばー！」

サスケがナルトの手を引いてカカシから遠ざかる。

そんな様子にかカシは苦笑いした後、親指をたてながら高らかに

言った

「これにて演習終わり、全員合格！！
よーしい！第七班は、明日より任務開始だア！！！」

「やったー！受かったあ！！」

そう俺達は悲劇の序章を一步踏み出す切っ掛けになった。

そして私はまたサスケに拉致られた。

第12話 波の国へ1（前書き）

お久しぶりでーす（^^）

まあ、色々とありまして今更新ってことに…

では第12話お楽しみ下さい。

第12話 波の国へ1

『目標との距離は？』

「3Mいつでもいけるってばよ」

「オレも」

「私も」

「早くしってば？」

その言葉を発した途端、一瞬静かになった。

『やれ』

「つまえたぜ」

周りの状況も考えずに騒ぎだした猫を黙らせ、火影の執務室に向かった。

「ああ……トラちゃん……心配したのよ……!」

結局、本物のトラを依頼人に渡したが猫にとっては生き地獄のような溺愛っぷり……却って捕まえなくてもよかったかもしれない。

次の任務は、と問えば、じいさんは一枚の紙を手に取り眺め始めた。

「んー…老中様の坊っちゃんの子守りに、隣町までのお使い、芋堀りの手伝いか…」

その言葉にピクリと反応した私は手をバツテンにして叫んだ。

「ダメー！そんなのノーセンキュー！オレってば、もっとこう…すげー任務がやりてーの！他のにしてー！…」

「（…一理ある）」

「（もーめんどじゃし…）」

「（ハー、そろそろ駄々こねる頃だと思った）」

それぞれがいろんなことを思い、いろんな表情をしていれば、今度
はイルカ先生が私へ説教を始めた。

「バカヤロー！お前はまだペーペーの新米だろーが！誰でも初めは
簡単な任務から場数を踏んでくり上がっていくんだ！」

イルカ先生の言葉にも私は一步も引かずにさらに続ける。

「だってだって！この前からずっとシヨボーイ任務ばっかじゃん！」

私はブーイングを始め、それを見かねた力カシ先生が呆れた溜め息を吐ながら私の頭をポカリと殴った。

「いいかげんにしとけ、こら！」

「ナルト！お前には任務がどーいうものか説明しておく必要があるな……」

見かねたじいさんは任務について語り始める。

任務の難易度や依頼の事、里の忍の階級、依頼は能力にあった忍者に上層部や火影が任務を振り分けている事を説明した。

「とは言ってもお前らはまだ下忍になったばかり、Dランクがせいぜいいいところじゃ」

「あーあ！そうやってじいちゃんはいっつも説教ばかりだ！」

「けど、オレってばもう…！いつまでもじいちゃんが思ってるようなイタズラこぞうじゃねえんだぞ！」

「分かった。お前がそこまで言うならCランクの任務をやってもらう。……ある人物の護衛任務だ」

「アハ！」

「ハア！」

火影様の発したその言葉に一番驚いたのは、もしかしたらカカシ先生かもしれない。

「（ちょっとちょっと！どっつい事なのナルト！オレ何も聞いてな

いんだけどー！？）」

「だれ？だれ？大名様！？それともお姫様！？（黙ってください？カカシ先生？説明は後でしますから）」

無邪気に遊ぶ影で焦るカカシ先生を容赦なく黙らせ、私はわくわくしている子供そのままの表情で身乗り出している。

演技と分かっているもその様子は微笑ましく、思わず口元を弛ませる私を見て火影様もまた口元を弛ませていた。

「そう慌てるな。今から紹介する！入ってきてもらえますかな……」

がらりと傷だらけの手が扉を開けると、まず見たのは手に握られた酒瓶。

「なんだア？超ガキばつかじゃねーかよ！……とくに、その一番ちっこい超アホ面。お前それ本当に忍者かぁ！？お前エ！」

「アハハ。誰だ一番ちっこいアホ面って…（私ぶっ殺してえナーこのジジイ）」

表の演技をしつつ、身長が低いのを気にしている私が三人の身長を改めて見比べ顔をしかめた。

「ぶっ殺す!!!」

「これから護衛するじいさん殺してどーするアホ（いやもうホントやめて！お願いだから!!!）」

「ナルト・・・準備が終わったらもう一度ここに来るのじゃ、分か

ったかのう？」

「はい！」

その様子をサスケ、サクラは不思議そうに見ていた。

「出発——！！！」

「何あんたが仕切ってんのよ」

そして、私に暴力を振るおうとしたので手を止めた。

「何すんのよナルト」

「何すんのはこっちの台詞だ、いい加減にしないと本気で殺すぞ、あと馴れ馴れしく俺の下の名前を呼ぶな！」

私を殴って言うこと聞かせることを考えていること自体がおかしい。

春野はまだ不満があるようでこちらを睨みつけている。

「（本当に大丈夫かコイツラ…超心配じゃのう）」

そしてカカシ先生が呟いた。

「これ以上遅れる訳に行かないから行くのか」

「「「それはこっちの台詞だ!」「」「」

はじめて依頼人とシンクロした瞬間だった。

依頼人の歩調に合わせゆっくり歩いていた一行、そこに不自然な水たまりを発見し、ナルト様と目を合わせ近くにより話始めた。

「（カカシ先生、あの水たまりに忍びがいるってば？薬使っていない？）」

「（ああ、ほどほどね）」

「（やрий、先生話が分かる!）」

そして私は水溜りに実験で失敗した薬を落とした。

「わっ、大事な実験の薬、落とした〜!!」

カカシ先生が水溜りを確認し火遁で燃やした。

そこに春野がさっきの仕返しとばかりに言いに来た。

「何よ、馬鹿よね…そんなの落として…と言うより、あんたに薬作る能力あったのね」

その言葉にキレた。

「おまえ…そんなに殺されたいのか」

「ナルト…ここは落ち着こう？ま、今任務中だしね」

深呼吸して落ち着いたナルトはいつもと違う雰囲気を出し、話始めた。

「それよりタズナさん何故任務虚偽したんです？三代目が首捻って任務書何度も見て特別事令頂いちゃいました」

「「特別事例？」」

「特別事例って言われても先生分らないんだけどな……ま、それよりもタズナさん話があります」

「……………依頼の内容についてじゃ、あんたの言う通りおそらくこの仕事はあんたらの“任務外”じゃろう…実はわしは超恐ろしい男に命を狙われている…」

「恐ろしい男…？ 誰です？」

「…あんたにも名前ぐらい聞いたことがあるじゃろ。海運会社の
大富豪、ガトーという男だ！」

「『ガトー？』」

「え…ガトーって…あのガトーカンパニーの？世界有数の大金持ち

と言われている……！！？」

「ガトーは表向き海運会社として活動しとるが、裏ではギャングや忍びを使い、麻薬や禁制品の密売…果ては企業や国の乗っ取りといった悪どい商売を業としている男じゃ…」

「ええ、彼についてはそういう話をよく耳にしますね。木の葉の里でも危険人物としてブラックリストに彼の名前が挙がっています。」

「そんな奴が一年ほど前じゃ…波の国に目を付けたのは。財力と暴力をタテに、入りこんできた奴はあつという間に島の全ての海上交通・運搬を牛耳ってしまったのじゃ。島国国家の要である交通を“独占”し、今や富の全てを“独占”するガトー…国も手が出せん状態だ。そんなガトーが唯一恐れているのがかねてから建設中の、ワシが手掛けている橋の完成なのじゃ！」

「なるほど…橋を完成させたくないから、橋を作っているオジサンが邪魔になったってわけね。」

「じゃあ…あの襲ってきた(?)忍者たちはガトーの手の者…」

「やめましょ、この任務私達には無理だわ」

その言葉を発した途端、殺気が強くなり春野の首の皮を切った。

「サクラちゃん何のために忍びになったの？まさかサスケの追っかけするため？今のサクラちゃん…ホントにサスケの追っかけにしか見えないってば、そんなだからチームメイトとしていて欲しくないけど」

「ナルト……確かにオレも春野の言動に迷惑被っている、今後一切俺に近づくな」

「サスケ君」

サクラは涙目になっていた。

「こーらお前達任務続行だ、行くぞ」

「暴言吐いたり、暴力振るったりしたらいい加減本気でその首はねるからな」

「はあ全くーみんな行くよ」

「よーしいーワシを家まで無事送り届けてくれよ」

「はいはい」

元気に意気込んでいるタズナと対象に嫌々そうに相槌を打つカカシ先生・・・

「（カカシ先生ドンマイ…それより二人来るよ）」

「（ああ、何イ？）」

「……っ!!」

草を揺らし出てきたのは……

真っ白なウサギだった。

先ほどとはまったく違った、真剣な表情で――

「（今の時期色が違っ**っ**てばね、変わり身用……だから敵さんのご登場**っ**て思**っ**つてば？）」「

「（正解……今は様子見だからね）」

そして背にある大刀に手をかけて行動を開始した。

「――全員ふせる――！」

隣にいたと伽月ともに地面にふせ、頭上を通る物を避けた。

木に食い込むその上に降り立つ人物それは……

「へーこりゃこりゃ。霧隠れの抜け忍、桃地再不斬君じゃないですか」

「ふーん」

「ふーんって…ナルト…あのねーまっ、しゃあないか……下がってるお前ら、こいつはさっきの奴らとはケタが違う」

緊張が走るなか、カカシ先生はゆっくりと自分の額当てに手をかけた。

「このままじゃあ…ちとキツイか…」

「写輪眼のカカシと見受ける………悪いが、じじいを渡してもらおうか」

その言葉に訳がわからなそうにするサクラ、それぞれ内容は違っても言葉にそれぞれ反応を示した。

一方サスケは怪訝そうにカカシ先生を見た。

「卅の陣だ、タズナさんを守れ…お前達は戦いに加わるな。それがここでのチームワークだ」

そう言いながら下がった額当てをゆっくり上げていき、隠されていた左目が公開された。

「……再不斬、まずは…オレと戦え」

「「「!?!」」」

「ほーー…、噂に聞く写輪眼を早速見れるとは…光栄だね」

ゆっくりとサスケが口を開き写輪眼の説明を始めた。

「…しかし写輪眼の持つ能力はそれだけじゃない」

「クク…御名答、ただそれだけじゃない。それ以上に怖いのはその目で相手の技を見極め、コピーしてしまうことだ。
オレ様が霧隠れの暗殺部隊にいた頃、携帯していた手配書^{ペンコ・ブック}にお前の情報が載ってたぜ。それにはこうも記されてた…一時期あの孤宵の特殊部隊に属していた千以上の術をコピーした男…コピー忍者の力カシ」

「さてと…お話はこれぐらいにしとこーぜ。オレはそのじじいをさっさと殺んなくちゃならねェ」

「」「」「！」「」「」

ザツと言われた通り陣でタズナを囲むようにして、警戒しながら構えた。

「つつても…カカシ！お前を倒さなきゃならねエーようだな」

「いた！もうあんなとこに…」

「しかも水の上!？」

立っている場所は水の上、チャクラを練り込んだせいか霧が濃くなっている。

「忍法…霧隠れの術」

すうーっと霧に紛れて姿を消してしまった。

「消えた!？」

カカシも冷や汗を流しながら口を開いた。

「まずはオレを消しに来るだろうが……… 桃地再不斬。こいつは霧隠れの暗部で無音殺人術の達人として知られた男だ。
サイレントキリング
気がついたらあの世だったなんてことになりかねない。オレも写輪眼を全てうまく使いこなせるわけじゃない…… お前達も気をぬくな」

「8か所」

「……………え？ なっ… 何なの!？」

いきなり再不斬の声が辺りに響き、周りを見回すもやっぱり姿は見えず、嘲笑うように再び言った。

「咽頭・脊柱・肺・肝臓、頸静脈に鎖骨下動脈、腎臓・心臓……さて…どの急所がいい？クク…」

「サスケ……」

名前を呼ばれビクツと肩を震わすも、口を開いたカカシ先生を見、ナルトやサクラも自然と視線だけをそちらに向けた。

「安心しろ、お前達はオレが死んでも守ってやる。オレの仲間には、絶対殺させやしないよ！」

少し振り返りながら笑顔で言ったカカシにその場にいた全員の緊張がほぐれたような気がした。

真っ二つに切られたカカシ先生の前にいたサクラが悲鳴を上げた。

カカシの体は水となり、後ろから再不斬の首元にクナイを添えた。

「終わりだ」

「ククク……終わりだと……わかってねーな」

クナイを突き付けられたにも関わらず余裕の態度で今までの力カシの今までの動きを分析したのか挑発的な視線をぶつけてくる。

「けどな…オレもそう甘かぁねーんだよ」

「そいつも水分身だ!!」

先ほどと同じような状況で、カカシは前に倒れるように伏せて大刀をかわすも、地面にそれを食い込ませ、それを軸に勢いを殺さずに蹴りをカカシの脇腹に食らわせた。

吹っ飛んだカカシを追いかけるように大刀を引き抜き走り出しても、あたりにちらばったまきびしに足を止めた。

「くだらねエ」

そう呟くと同時にカカシが水中に入った。

その後を追って再不斬が飛翔する。

「カカシ先生その水から離れろ！嫌な予感がする」

「フン…バカが 水牢の術！」

水が球体を作り、その中にカカシが閉じ込められ、慌てるカカシを見て嘲笑うかのように喉を鳴らした。

「ククク…ハマったな、脱出不可能の特別牢獄だ！！お前に動かれるとやりにくいんだな。
…さてと…カカシ、お前との決着は後回しだ。…まずはアイツらを片付けさせてもらうぜ」

そついうと術を発動して、近くにあった水溜まりから水分身を作り

だし、そこから感じた殺気にぞくりと体を震わせ、身構えた。

「ククッ…偉そーに額あてまでして忍者気取りか…だがな、本当の
“忍者”ってのはいくつもの死線を越えた者のことをいうんだよ」

吹っ飛ばされ地面にたたきつけられ。その際に外れた額当てが再不斬によって踏みつけられた、再不斬は感嘆の声を漏らした。

「ほお・・・小僧やるじゃねか」

そこにはクナイで後ろから襲いかかってきた水分身を倒すナルトの姿があった。

「だから・・・？」

カカシ先生は正気付き声をあげた。

「お前らぁ！！タズナさんを連れて早く逃げるんだ！コイツとやっても勝ち目はない！！」
オレをこの水牢に閉じ込めている限りこいつはここから動けない！
水分身も本体からある程度離れば使えないはずだ！！
とにかく今は逃げろ！」

ナルトは影分身を作った。

「おい、その眉なし…お前は何を踏んでいるか分かってんのか？」

「（風遁烈風掌）」

「（風遁大突破）」

再不斬はちゅうにまい消えた。

「サスケ」

「耳を貸せ」

「っ!？」

「フン、ナルト・・・お前がチームワークかよ」

「さあ暴れるぜ」

第13話 波の国へ2

「ふーん、小僧って言われる嫌なんだってばね」

大量の影分身を作り、再不斬を襲わせた。

「風魔手裏剣！」

「!？」

再不斬の背後からサスケが大手裏剣を投げる。

再不斬はその場から動けないし、両手はすでに塞がっている。逃げ

場はない。

「甘い！」

しかし身長故に軌道が低く、ジャンプして避けられる。

だが……それも、戦術のうちの一つ

籠手を再不斬へ突きだす。

一瞬の後、ボフンと湧き出た煙から本体が飛び出した。

「そちらがな・・・」

再不斬の手は水牢から放たれた。

「この　ガキ　！」

「だ・か・ら・ガキって言うなっば」

「ナルト・・・よくやった、あとは俺に任せておけ」

再不斬を警戒しながらも、今度は完全に傍観した。

結局私が一発喰らわしたせいで冷静さを欠いた再不斬の軽い自滅と
いうか 最後は霧隠れの追い忍を

名乗る少年が水を挿した。

再不斬の首に、二三本の千本が貫通している。

「ありがとうございます。ボクはずっと
機会をうかがっていた者です」
確実にザブザを殺す

「確かその面
お前は霧隠れの追忍だな
」

「 さすが よく知っていらっしやる」

結局、自称霧の追い忍は再不斬の死体を背負って消えた。

「みんな超すまなかったの！わしの家でゆっくり休んでくれ！」

ドサ！

カカシ先生が倒れた。

「カカシ先生チャクラ少ないのにそんなに無茶するから・・・そうなるんですよ」

「うめんねー」

「影分身の術・・・変化」

皆驚いたように見る。

「な、ナルトな、何で先生に変化するの？」

「ん？何となくだってば」

「俺が荷物持つかからカカシをかついで来い」

「何その命令口調・・・今は任務だから我慢すっけど、絶対ギャフンと言わせてやるってばよ」

「フン、言ってる」

「タズナの家に着き」

「大丈夫かい？先生」

タズナの娘がカカシ先生を心配している。

「いや……、一週間ほど動けないんです……」

頼りに出来ないと認識した私達は溜息を出した。

「なあーによ！ 写輪眼つてスゴイけど、体にそんなに負担がかかるんじゃないか！」

「でもま！ 今回あんな強い忍者を倒したんじゃ。おかげでもうしばらくは安心じゃろう！」

「（カカシ先生・・・何か大事なことを忘れてない？）」

「（大事なことって？）」

「それにしても、さっきのお面の子って何者なのかな？」

面をしていた追い忍の少年のことがどうもまだ引っかかっている様子のサクラ。

それにカカシは静かに口を開いて説明した。

「アレは霧隠れの暗部：追い忍の特殊部隊がつける面だ。彼らは通称死体処理班とも呼ばれ、死体をまるで消すかのごとく処理することとで、その忍者が生きた痕跡の一切を消すことを任務としている。忍者の体はその忍の里で染みついた忍術の秘密やチャクラの性質...その体に用いた秘薬の成分など様々なものを語ってしまう...。たと

えばオレが死んだ場合…写輪眼のような特異体質の秘密は全て調べあげられてしまい…下手をすれば敵に術ごと奪い取られてしまう危険性だってあるわけだ…。忍者の死体はあまりにも多くの情報を語ってしまう。つまり“追い忍”とは…里を捨て逃げた“抜け忍”を抹殺し、その死体を完全に消し去ることで…里の秘密を外部に漏れ出してしまうことをガードするスペシャリストなんだ。音もなく、嗅もない…。それが忍者の最後だ」

「こわー」

「（何当たり前言うてんのに腹立つ、春野・・・それよりホントに気付かないの？）」

一旦寝たカカシ先生はようやく重大なことに気がついたようです。

「……ギャ——！！！！」

カカシ先生のマスクを取ろうと躍起になっていたサクラは眼を覚ますとは思わなかったのか悲鳴をあげてドサッとカカシから離れた。

「あらカカシ先生、起きたの？」

やってきたツナミはカカシに言うが、カカシは深刻な顔をしながら上体だけ起こし、顔に手を当てて考え込んだ。

「（何だ…奴は死んだというのに…この言い知れぬ不安感は…重大な何かを…何かを見落としている気がする…違う…何が変だ…まさか…オレとしたことが見落としていた！？）」

「（ナルトもしかして再不斬は生きてる？）」

「（大正解・・・ようやく気がついたの？）」

「どうしたの？先生」

聞き出したのはサクラだ。

「……………死体処理班ってのは、殺した者の死体はすぐその場で処理するものなんだ……………」

カカシが軽くそれを説明する。それにサスケは眉をひそめた。

「それがどうした？」

「分からないか？あの仮面の少年は再不斬の死体をどう処理した？」

「は？」

カカシの言葉にサクラは拍子抜けの声を出した。

「そんなの知るわけないじゃない！だって死体はあのお面が持つて帰ったのよ」

「そうだ……。殺した証拠なら首だけ持ち帰れば事足りるのに……。だ、それと問題は追い忍の少年が再不斬を殺したあの武器だ……」

「（ただの千本）……………！！」

その時サスケは何かに気付いたのか、目を見開いた。

「……………まさか……」

「あーあ…そのまさかだな」

まだ分からないサクラとタズナは首をかしげる。

「さっきからグチグチ何を言っとるんじゃお前たち…！？」

じれったいという表情のタズナ。

するとカカシはある意味すごい怖い顔になった。

「おそらく再不斬は生きてる！」

「どーゆーことなの！？カカシ先生、再不斬が死んだのちゃんと確認したじゃない！！」

そういつサクラ。

「確かに確認はした…が、あれはおそらく…仮死状態にただけだろう…あの追い忍が使った千本という武器は、急所にでも当たらない限り殺傷能力のかなり低い武器で…そもそもツボ治療などの医療にも用いられる代物だ、別名死体処理班と呼ばれる追い人は、人体の構造を知り尽くしてる…おそらく人を仮死に至らしめることも容易なはず、1、自分よりもかなり重いハズである再不斬の死体をわざわざ持って帰った…。2、殺傷能力の低い千本という武器を使用した。この2点から導きだせるあの少年の目的は…再不斬を“殺しに来たのではなく助けに来た”。そう取れないこともない」

「……………超考えすぎじゃないのか？　追い忍は抜け忍を狩るもんじゃろ！」

そう言うタズナ。だが忍には忍のやり方がある。

「いや…クサイとあたりをつけたのなら、出遅れる前に準備しておく…それも忍の鉄則！」

そう言うカカシ。

「ま、再不斬が死んでるにせよ、生きているにせよ、ガドーの手下にさらに強力な忍がいなくても限らん……！」

その時カカシは見た。
再不斬が生きてるかもしれないというのに喜んでるナルトの顔を

…
—。

「……………（フッ…あの再不斬が生きているかも知れんと聞いて喜ぶとはな…）」

「先生！出遅れる前の準備って何しておくの？先生とーぶん動けないのに…」

そう質問するサクラ、内心私達を殺す気がシャンナローというオ
ーラが背後から出ている。

「クク…」

「？」

するとカカシがいきなり軽く笑い出した。

それにサクラは軽く首をかしげた。

そして…

「お前達に修行を課す!!」

そうカカシは言った。

「えっ!!…修行って!!…先生!! 私達が今ちよつと修行したところでたかが知れてるわよ!! 相手は写輪眼のカカシ先生が苦戦するほどの忍者よ!!」

「サクラ…その苦戦しているオレを救ったのは誰だった…。お前達

は急激に成長している」

そう言うカカシにサクラは、うつと言葉を詰まらせた。

「とは言ってもだ。おれが回復するまでの間の修行だ……。まあ、お前らだけじゃ勝てない相手に違いはないからな…（ナルトは別次元の実力者だし…簡単にやられるワケないしね）」

チラッとナルトを見たカカシ先生。

ナルトは笑顔でカカシ先生の所に来てほっぺを引っ張って離れた。

「でも先生！！再不斬が生きてるとしたらいつまた襲ってくるかも分からないのに修行なんて…」

「面白くなってきたってばよ！」

「面白くなんかないよ…」

一つの声が聞こえ、三人が振り返ると無愛想な…無表情の一人の男の子がチョン…とそこにいた。

「！！」

「!?」

「おおいナリ!! どこへ行ってたんじゃ!!」

「お帰り…じいちゃん…」

少年は靴を脱ぎながらタズナに言い、タズナの傍に歩み寄って抱きついた。

どうやらタズナの孫で、ツナミの息子のようだ。

「イナリ、ちゃんとあいさつなさい！おじいちゃんを護衛してくれ
た忍者さん達よ！」

挨拶一つもしないイナリを注意するツナミ。

だがタズナはいいんじゃない、いんじゃない、なんて孫バカになっていた。

「・・・」

イナリをジーツと見る楓たちにイナリもナルト達を少し見る。

そして・・・

「母ちゃん…こいつら死ぬよ…」

その言葉に三人は沈黙した。

だがすぐに沈黙を破ったのはナルトだ。

「何なんだってばよ」

「ガトー達に刃向かって勝てるわけがないんだよ」

「死にたくないなら早く帰った方がいいよ……」

「……………」

「どこへ行くんじゃ、イナリ」

襖の方へ行くイナリを止めたタズナ。

「部屋で海を眺めるよ……」

襖が閉まる音が静かに響く。

「すまんのう…」

そして、私の特別事例が始まった。

第14話 波の国へ3

次の日――

ナルト達はタズナの家を出て近くの森に来ていた。

そこで修行をやるようだ。

「ではこれから修行を始める――！」

カカシの言葉に三人は少し気を引き強めた。

「と…その前に、お前らの忍としての能力チャクラについて話そう。お前らはちゃんとチャクラのことについて理解しているよな？」

「それは知ってるってば、そうじゃなきゃ忍術とか使えないってば」

「ナルトのいうとおりよ、先生！」

そう言うナルトとサクラに力カシは悪い、悪い、と苦笑しながら謝って軽く話し始めた。

「お前らも知つてのとおり、チャクラを練り上げるとは身体エネルギーと精神エネルギーを取り出し、体内で混ぜ合わせることをいう。そしてそれは当然発動したい“術”によってそれぞれのエネルギーの取り出す量…つまり調合が変わるんだ…。今のお前らはチャクラを効果的に使えていない！いくらチャクラの量を多く練り上げることが出来ても…術によってバランスよくコントロール出来なければ術の効果が半減してしまうばかりか、下手をすると術自体が発動してくれない。そしてエネルギーを無駄遣いしてしまうため長い時間戦えない…などの弱点が出来てしまうってわけだ」

「
…」

「でまあ、体でそのコントロールを覚えるんだ、命を張って体得しなきゃならないツライ修行！」

「なっ…何をやるの？」

カカシの言葉に少し緊張が張るサクラとサスケ。

ナルトは全然慣れているので平然だ。

そしてカカシが答えたのは…――。

「ん！？ 木登り…！！」

「（…）ちっば」

「木登りー！！？」

「
そうだ…」

驚きの声を上げるサクラにサラッと答えるカカシ。

「そんなことやって修行になんの？」

ちよつと疑つてゐるような顔をするサクラにカカシはすぐに説明する。

「まあ話は最後まで聞け。ただの木登りじゃない！ 手を使わないで登る」

「！」

「……っ」

「（またやらなきゃいけないってば）」

少し驚くサスケ、サクラは首を傾げる。

「ま！
…見てろ」

カカシはそういい、両手で印を結んで集中した。

すると足元にチャクラが集まり、カカシは松葉杖を突きながら一本の木に向かう。そして木の幹に足をつけると・・・

「
「！
」」

スタスタ……

綺麗に垂直に木を登っている。

それも手を使わず、足だけで普通に歩いている。

「登ってる……」

「足だけで垂直に……」

「（初歩的なことだけど、みんなは初めて見る光景だってばね……）」

驚くサスケとサクラだが、ナルトは全然驚かない。

「…と、まあこんな感じだ」

カカシは木の枝にぶら下がるようにナルト達を見下ろした。

傍から見ればコウモリのようなようだ。

「チャクラを足の裏に集めて木の幹に吸着させる。チャクラは上手く使えばこんなこともできる」

「ちょっと待って！ 木登りを覚えて何で強くなれるのよ！」

「ここからが本題だ、ちゃんと聞けよ？ この修行の目的は…まず第1にチャクラの“調節”^{コントロール}を身につけることだ。練り上げたチャクラを必要な分だけ必要な箇所…。これが術を使うにあたって最も肝心なことであるのはさっきも言ったが、案外これが熟練の忍者でも難しい。この“木登り”において練り上げなくてはならないチャクラの量は極めて微妙…さらに足の裏はチャクラを集めるのに最も困難な部位とされている。ま！ つまりは…この“調節”を極めてればどんな術だって体得可能になるわけだ。理論上はな！」

そう説明する力カシ。

「第2の目的は足の裏に集めたチャクラを維持する“持続力”を身につけることだ。様々な術に応じてバランス良く“調節”されたチ

ヤクラをそのまま維持することはもつと難しい。その上忍者がチャクラの練るのは絶えず動き続けなくてはならない戦闘中がほとんどだ。そういう状況下、チャクラの“調節”と“持続”はさらに困難を極める。だからこそ木に登りながらチャクラのノウハウを修得する修行をするってワケ！　…とまあ、オレがごちゃごちゃ言ったところまでーこーなる訳でもなし…」

カカシはポケットから三本のクナイと出した。

「体で直接覚えてもらうしかないんだけど」

そう言っただルト、サスケ、サクラの足元にクナイを投げた。

「今自分の力で登りきれぬ高さの所に目印としてそのクナイでキズを打て。そしてその次にその印よりさらに上に印を刻むよう心がける。お前らは初めから歩いて登れるほどうまくはいかないから、走った勢いにのり、だんだんとならしていく……いいな！」

「了解だつてばよ」

一応返事したナルトはすぐ近くの木のほうを向き、サスケとサクラもそれぞれ各々が決めた木のほうを向く。

そしてチャクラを集中させ、3人はいい状態になる。

「...は...」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9842n/>

予言の御子

2011年12月2日15時54分発行